陸土を踏むと同時に僕は、死ぬかも知れないとさへ思つた。

念彼觀音力も、あまり大したものではない。

姉丈はお鼻を廻つて歸ると言ふ。

それで到底もやりきれないので、宿屋へ行つて直ぐ布團を敷いて貰つて、頭を冷した。

脈博が百三十ばかりもある。

野田も隨分蒼い顏をして弱つてゐる。

一泊して變な夢を見た。

僕は遺精があつたようだ。

あくる朝お粥を少し食べて、汽車で大洲まで出て肱川の景色を寸時見ながら、それからは馬車で、五里も道を搖られ、乘り合つた大阪の商人に、流行節を敎はつたりしながら守和島へ着いた。

僕の父と、僕とも年齡が二十ばかり違つてゐる義母が途中まで迎ひに來てゐた。

『龍雄は一週間前に亡くなつて火葬にした』窺ふような目で言ふ。

オー、僕は芝の所へ寄つた。